

空手道詳説（19）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その3. 第二尚氏王統の誕生）

（9）尚真王の妃と世子の廃嫡

ア 尚真王の妃居仁

第二尚氏王統を樹立した初代王の尚円は、1976年7月在位7年にして崩御すると、三司官をはじめ重臣たちは、世子の尚真が11歳という若年であることに危惧の念を抱き、尚真が成人するまでという前提で、翌8月に尚円の弟・尚宣威を第2代王に即位させた。時に、尚宣威47歳であった。

しかし、亡き尚円の妃・宇喜也嘉は、一時も早く尚真を王位に着けたい思いから、尚宣威を王座から引きずり降ろす陰謀を企てた。その陰謀とは、「君手摩（きみてずり）」という神を出現させ、御神託を戴くという手立てであった。

それまで君手摩は、即位した王を讃えるのが通例のはずが、翌年2月、予め仕組まれたお告げは、『首里におられた太陽王（亡き尚円王）が、可愛く思ってきた子（尚真）の遊びを、眺め見ておられることよ』と、尚真の即位を促す言葉であった。

御神託を聞いた尚宣威王は、自ら玉座を尚真に明け渡して着座させ、ここに第3代尚真王が誕生した。

王座を捨てた尚宣威は、領地である越来（ごえく）に隠遁したが、それから月日も浅い7月、失意のうちに逝去した。その経緯や、宇喜也嘉の目に余る行状などは既述のとおりである。



第二尚氏王統家紋

国家重大事の場面で、神の託宣を信じ恐れ慄く姿は現代なら考え難いことながら、

神の存在と、人智の及ばない偉大なる自然の力を結びつけ、素朴な信仰心を抱く当時の琉球人にとっては、こんなトリックも大手を振って通用した。

『王位に着くべきでなかった自分が、周囲から言われるまま王となってしまった』という自責の念から、悲惨な思いで都落ちした尚宣威こそ哀れという他はない。

宣威王には二男一女があった。長男は朝理、次男朝易で、末子に居仁（きよじん、1463～没年不詳）という姫がいた。

宣威がおうとなった直後、初代・尚円王の嫡子である尚真に将来の王妃を決めなければという課題がでて、妃候補に浮上したのは宣威の王女・居仁であった。

居仁は才気に長け、見目うるわしい姫で、宮中であって人目を呼ぶ存在であった。尚真と居仁は従姉弟関係になり、居仁が2歳年長である。

幼い頃から才色兼備の居仁の人となりは、格好の妃候補として尚円王の存命中から話題となっていたようで、三司官（王国の重要案件を総理した重職で、3人制の役職）は異存なくこの縁組を進行させた。

尚真王の母宇喜也嘉に、三司官からこの縁組が伝えられたのは決定された後で、前王の妃で現王の母后としても、三司官の決定に不服を言える理由が見当たらなかった。この場は一先ず引き下がる他なかったようである。

宇喜也嘉の尚宣威に対する嫌悪の感情は、尚宣威の退位と死により収まったかに見えても、『我が子尚真をさておいて、47歳の男がぬけぬけと王位に着けたものだ』とあらぬ憎みから、非常な手段を使い廃位に追いやった後でも、一族ことごとく排除したい気持ちは胸中深く残り、日ごと増幅していったに違いない。

『坊主が憎けりゃ袈裟まで憎い』の譬えどおり、居仁を忌み嫌う感情は尚宣威に対する気持ちと何ら変わりなかった。この宇喜也嘉の心底深く根をはる憎悪感、後々まで尾を引くことになる。

1479年、董旻（きんびん）を正使とする冊封使節団（中国が、君臣関係国の国王時に派遣する使節団）が来琉し、その式典終了後の年末、尚真王と居仁の婚礼は人々の祝福のうちに行われた。時に、尚真15歳（数え年、以下同じ）居仁17歳の初々しい国王とお妃が誕生した。

しかし、居仁にはなかなか子供が授からなかった。やっと懐妊し、男児が生誕したのは1494年で、居仁32歳、尚真が30歳であった。琉球国に限らず、当時の平均寿命は50歳に達していないから、32歳の初産はかなりの高齢出産といえよう。

その男児は朝満（尚維衡、1494～1540年。以下、「維衡」と記す）と名付けられた。当然、維衡は次の王位を継承すべき王嗣（王の世継ぎ）である。

維衡が誕生して3年後に、第2夫人の華后（かこう。生年不詳～1516年）が男児を

生んだ。

維衡は妃の生んだ子であり嫡男として、華後の生んだ男児は5男と記録に残るが、尚真王には妃の他に二人の夫人、他に妻（夫人より下位）がいたとされているため、維衡が最初の男児という訳ではない。

状況は変じ次項に記すように、その後維衡は廃嫡され、華後の生んだ男児が尚真王崩御後に第4代国王の尚清（1497～1555年、在位：1527～55年）となって、王家を継承するのである。

イ 維衡の廃嫡

尚真王は、亡き父王尚円の菩提寺建立を思い立った。首里城の北東側に好地を選んで1492年に着工し、2年後の1494年天徳山円覚寺（えんがくじ）として落慶した。

開山は芥隠承琥（かいいんしょうこ。生年不詳～1495年）という日本僧で、京都の臨済宗南禅寺で修行した後、1450年に琉球に渡り、第一尚氏王統第7代尚泰久王（1415～60年、在位：1454～60年）から尚真王に至るまで歴代の王に仕えて禅宗の布教に努め、歴代王の帰依を得ている。



七堂伽藍の例、絵図

この寺院は、禅宗の故事に則る七堂伽藍を完備した寺であった。

本土の鎌倉市にあって、1282年北條時宗が創建した寺とは、寺の名は一緒でも無関係である。

琉球国を除いても円覚寺という寺は、全国に8か寺あって、円覚とは仏教経典の「円覚経」に由来する。この「円覚経」に「大円覚心」という言葉があって、仏の悟りの本性、完全にして円満な悟りである本覚を意味する。

丁度この円覚寺が完工した年に維衡が誕生したため、尚真王は、父尚円王の菩提寺建立の発願建設中に懐妊し、落慶後に世子を授かったことは、己の信仰心に天が応えてくれたという思いが強かった。

尚真王は維衡の誕生を心から歓喜し、宮中を挙げて祝賀したに違いない。何せ、居仁（妃）と結婚してから15年目にして授かった御子である。

しかし、その歓喜も何処やら、居仁とその子の維衡は不運の道を進むことになるのであった。

それは、王が寵愛する華后が子を生んで間もなく、維衡の廃嫡問題が発生するからである。それも一度ならず再度と伝わるので、居仁と維衡の親子にとっては居た堪れない悶々とした日々を送ったに相違ない。

最初の廢嫡は、(8) 尚真王の治世と禁武政策、イ「玉陵の建造」のところで述べたとおり、1501年の王家墓陵となる玉陵(タマウドウン)の建造と同時に立てられた「玉陵の碑文」(玉陵に葬られるべき有資格者の名を記した)に維衡の名前は刻されていないため、維衡が7歳より前であろう。その後何らかの理由で一旦廢嫡が解けたようであるが、二回目の廢嫡が問題で、口碑に残るのは次である。

第二夫人の華后は、元は宇喜也嘉の侍女という前歴から、母后宇喜也嘉とは特に親密であり、母后が外出する時は何時も随伴していた。その上、王からこよなく寵愛されていたため、それを笠に着て思いのままに振る舞う傾向があった。華后の狙いは、自分が生んだ尚清を尚真の跡継ぎ(皇太子)にする野心に満ちていた。

常々、居仁や維衡の讒言を重ねるばかりか、ある日華后はとんでもない謀略に出た。

華后は庭に出て、維衡が通りかかったのを見計らって蜂を捕え、自分の胸の上に這わせておいた。その蜂を見た維衡は、華后の急を救おうとの一心から蜂を払い落とした。

とたんに華后は『維衡が私の乳房を掴んだ』とわめき叫び、直ぐさま、尚真にこのことを告げ口した。

聞いた尚真王は大いに怒って、『ふとどきな維衡を斬罪にせよ』と処刑を言い渡した。その急を救ったのは島我那覇親方という士族で、処刑したことにして那覇の自宅に匿い、王の怒りが解けるのを待っていた。

時が過ぎ、尚真王の怒りは収まり、維衡を斬罪にしたことを後悔し、口にするようになっていた。頃合いを見計らって、島我那覇親方は王に向かって『実は処刑したことにして、私が維衡王子を匿っていた』と告げると、王は大いに喜び維衡を浦添王子として処遇し、浦添城に住ませた。

ということである。

この話には、もとより矛盾点が存在する。例えば、8歳の子の掌が胸に触れたとしても、それは欲情からであるはずはない。それを『私の乳房を掴んだ』と華后が大騒ぎして王に告げた。

父王菩提寺とした正覚寺落慶の年に生まれ、信心のせいで『父尚円の生れ変わりを授けてくれた』と大騒ぎして喜んだ我が子なのに、寵愛する夫人の讒言を聞いて『華后の乳房をつかむなんて不届き千万、斬罪の刑にせよ』と言い渡したのである。

その裁断を聞いた忠臣が密かに匿い、時期を見て『実は・・・』と告白する。どうにも話が過ぎ過ぎている感は免れない。廢嫡に至る荒唐無稽な出来事か事件がでっち上げられたのは確かと思われるが、真実はもっと異なるものであつたらう。

ここで腑に落ちないのは、このような伝承とか口碑が残ったこと自体、尚真王の達成した改革の実績評価に対し、後味の悪さが残ることである。

第二尚氏王統初代王である父の尚円は、クーデターによって第一尚氏王統を転覆させ新たな王統を樹立し、第3代王の尚真は第二尚氏王統中で最長記録となる50年間王として君臨し、その間に中央集権制や領土の拡大など多くの功績は、首里城にある「百浦添欄干之銘」に記されるとおりで、後々まで『琉球王国の黄金時代を築いた』と人口に膾炙されるほど優れた統治者である。

しかし、何故か「中山世鑑」など史書の記載事項は、他の王に比べて少ない。そこには何らか理由があったのではと思うが、行き着く先は初代王尚円の妃、尚真の実母・宇喜也嘉にあるのではと思われる。

第二尚氏王統王家の墓陵である玉陵が1501年に完工し、その4年後1505年、宇喜也嘉は61歳で没した。当時なら平均寿命を大幅に超えており、尚真王は41歳の時であった。

宇喜也嘉は18歳で初代尚円王の夫人となり、21歳で尚真を生み、以来我が子を王にしたい一心から惹起した陰謀は、尚円の弟尚宣威が第2代王となるや、彼に対する偏執狂とっていいほどの嫌悪感と、一族全てに及んだ攻勢的な所業、尚円死後の破廉恥行為など、数々の悪行が尚真の目の前で行われたことに起因しはしまいか。

このよう行状が、尚真王の即位から宇喜也嘉の死まで30年近くも続いたことで、王が親身を砕いた努力と業績に、一つの汚点を残したのでないだろうか。

また、他から、特に大和（徳川や薩摩）や明国から過去のスキャンダラスなことを探られてはという不安も、「中山世譜」の編纂者・羽地朝秀の心中にあったのではと筆者は推測する。

尚宣威にしても、長く国王でいたい野心など毛頭なかったようで、自身、国王という器ではないと承知していたであろう。15歳年上の兄尚円（金丸）が崩御するまで心底から尊敬し頼りにして、兄から受けた恩恵に感謝していたに相違ない。

尚真が年少だという理由で、一時という約束で王位に着いただけで、人柄はいいが逆境に弱いタイプの人だったと思われる。

第4代尚清王以降の王や王族たちは、尚宣威や廃嫡となった維衡との関係については、宇喜也嘉の思惑など全く意にも止めず、婚姻関係も結んでいた。

時代は下がり、尚真王の崩御から約80年、4代後の尚寧王時代の1609年に、薩摩藩から侵攻を受け、琉球王国は歴史上最大の打撃を受けた。

尚寧王には、尚宣威の玄孫（孫の孫、やしゃご）、尚維衡の曾孫（孫の子、ひまご）という血縁関係にあった。

そのことは、あたかも「玉陵の碑文」の呪い文、『この子孫は、千年万年に至るまで、このところにおさまるべし。もしのちに、あらそふ人あらハ、このすみ見るべし。こんかきつけそむく人あらハ、てんにあをき、ちにふしてたたるへし』（原文のまま）の祟りでないかと噂が飛び交い、あらぬ謂れ因縁が伝え残された。

ここまで、尚円王、尚宣威王、尚真王に関し紙面を多く使ってしまった。琉球王国の基盤をなす黄金時代を築いた尚真王時代、1609年薩摩藩の琉球侵攻、1875年の明治新政府による「琉球処分」が、琉球王国にとって大きな二つのうねりとなって襲うのである。



玉陵の碑と碑文（再掲）

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1986年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行